

〔共同研究：「天変地異」の社会学〕

仏典に見られる「大地震動」

邢 東 風

はじめに

仏典には地震に関する記載が少なくない。それらは概ね二種類ある。ひとつは、いわゆる「大地震動」と称するもので、通常は仏・菩薩・大梵天王、あるいは道を得た者によって起こされる地震で、この種の地震は宗教的な意味を付与されている。いまひとつは単に「地震」と呼ばれる普通の地震で、宗教的な意味は殆どない。勿論、仏典において「大地震動」と「地震」とが厳密に区別されていた訳ではないが、それぞれの意味が微妙に異なる場合が多い。両者を数の上で比較すれば、「大地震動」の記載が多く、「地震」の記載が少ない。「天変地異の社会学」の観点からは、前者の記載こそ注目に値するので、ここでは主に「大地震動」の記載を検討していくこととする。

「大地震動」に関する記載は、既に早期仏教の経典に見られる。例えば、世尊が説いた七仏のことを記載する『仏説七仏経』¹⁾には、毘婆尸仏が生まれた時に現れた不思議な諸現象を記録しているが、「大地震動」はその一つである。

仏言、苾芻、汝等諦聽、我今説之。於過去世、有大国王名滿度摩、彼王妃后名滿度摩帝。爾時毘婆尸仏從兜率天降下閻浮、入於母腹、住胎藏中、放大光明、照諸世間、無有幽暗、而諸惡趣、一切地獄、日月威光、亦不能照、仏光所及、忽得大明。……彼菩薩摩訶薩、右脇生時、大地震動、身真金色、離諸垢染、放大光明、普照世間一切境界、所有惡趣、黑暗地獄、忽然大明²⁾。

兜率天 (Tusita) は仏教に説かれる欲界十重天の第八重天で、閻浮提 (Jambudvīpa) は瞻部洲とも訳され、仏教に説かれる須弥山 (Sumeru) の南にある大地で、人間が住むところに相当すると考えられる。毘婆尸仏は元々兜率天にいたが、後に閻浮提へ降り、母胎に入って住

1) 七仏は、①毘婆尸仏 (Vipasyin)、②尸棄仏 (Sikhin)、③毘舍浮仏 (毘舍婆仏とも、Visvabhu)、④俱留孫仏 (拘楼孫仏とも、Krakucchanda)、⑤俱那含牟尼仏 (Kanakamuni)、⑥迦葉波仏 (Kasyapa)、⑦釈迦牟尼仏 (Sakyamuni) のこと。毘婆尸仏は過去91劫の仏で、尸棄仏と毘舍浮仏は過去31劫の仏で、俱留孫仏は賢劫の第6劫の仏で、俱那含牟尼仏は賢劫の第7劫の仏で、迦葉波仏は賢劫の第8劫の仏で、釈迦牟尼仏は賢劫の第9劫の仏で、即ち現在の仏である。

2) [宋] 法天訳『仏説七仏経』、『大正蔵』第1冊、第152頁b—153頁a。
キーワード：仏教、仏典、大地震動、地動、地震

み、そこから光明を放って世間を照らした。彼が母の右脇から誕生した時、大地が振動し、金色の体が再び輝き、すべての世界を照らした。この「大地震動」は、仏の体から光明が放たれたと同様、仏の誕生に伴う不思議な現象であろう。

七仏に関する記載は、他には『長阿含経』巻一の『大本経』と『増一阿含経』巻四十四の『十不善品』にも見られる。阿含部は早期仏教の教典であるから、七仏の説が阿含部の中に既に記録されるのは、仏の誕生による「大地震動」の説が早期仏教の時代に既に形成されていたことを意味する。なお、これに類似した説話は後の大乘仏教の経典にもよく見られる。

一 地震の原因について

地震の原因について、仏典には「八因縁」説と「三因縁」説とがある。

「八因縁」は地震を引き起こす八種の原因を指し、この説は阿含部の経典に見られる。例えば『長阿含経』巻二に次のようにみえる。

仏告阿難、凡世地動、有八因縁。何等八。夫地在水上、水止於風、風止於空、空中大風有時自起、則大水擾、大水擾則普地動、是為一也。

復次阿難、有時得道比丘・比丘尼・及大神尊天、觀水性多、觀地性少、欲自試力、則普地動、是為二也。

復次阿難、若始菩薩從兜率天降神母胎、專念不亂、地為大動、是為三也。

復次阿難、菩薩始出母胎、從右脇生、專念不亂、則普地動、是為四也。

復次阿難、菩薩初成無上正覺、當於此時、地大震動、是為五也。

復次阿難、仏初成道、轉無上法輪、魔・若魔・天・沙門・婆羅門・諸天・世人、所不能轉、則普地動、是為六也。

復次阿難、仏教將畢、專念不亂、欲捨性命、則普地動、是為七也。

復次阿難、如來於無余涅槃界般涅槃時、地大振動、是為八也。

以是八因縁、令地大動³⁾。

第一種は風力の作用によるもの、第二種は道を得た比丘・比丘尼・天神などが自分自身の力を試すために引き起こしたもの、第三種は菩薩が兜率天から降り、母胎に入る時に引き起こしたもの、第四種は菩薩が母胎から生まれた時に引き起こしたもの、第五種は菩薩が始めて悟りを開いた時に引き起こしたもの、第六種は仏が始めて道を修成し、説法する時に引き起こしたもの、第七種は仏が寿命を終えようとする時に引き起こしたもの、第八種は仏が涅槃に入る時に引き起こしたものである。

また、『増一阿含経』巻三十七には次のような記載ある。

3) 『大正蔵』第1冊、第15頁c—16頁a。

聞如是，一時仏在舍衛国祇樹給孤独園，爾時世尊告諸比丘，天地大動，有八因緣。云何為八。比丘當知，此閻浮里地，南北二万一千由旬，東西七千由旬，厚六万八千由旬，水厚八万四千由旬，火厚八万四千由旬。火下有風，厚六万八千由旬，風下際有金剛輪，過去諸仏世尊舍利，尽在彼間。比丘當知，或有是時，大風正動，火亦動。火已動，水便動。水已動，地便動。是謂第一因緣使地大動。

復次，菩薩從兜術天降神來下，在母胎中，是時地亦大動，是謂第二因緣使地大動。

復次，菩薩降神出母胎時，天地大動，是謂第三因緣使地大動。

復次，菩薩出家學道，成無上正真等正覺，是時天地大動，是謂第四因緣使地大動。

復次，若如來入無余涅槃界而取滅度，是時天地大動，是謂第五因緣使地大動。

復次，有大神足比丘心得自在，隨意欲行無数變化，或分身為百千之数，復還為一，飛行虛空，石壁皆過，踊没自由，觀地無地想，了悉空無，是時地為大動，是謂第六因緣地為大動。

復次，諸天有大神足，神德無量，從彼命終還生彼間，由宿福行具足諸德，捨本天形得作帝釈・若梵天王時，地為大動，是謂第七因緣地為大動。

復次，若衆生命終福尽，是時諸国王不樂本邦，各各相攻伐，或飢餓死者，或刀刃死者，是時天地大動，是謂第八因緣使地大動。

如是比丘，有八因緣使天地大動⁴⁾。

ここで説かれる八種の地震の原因は、先に見た『長阿含經』の「八因緣」と多少の差異はあるものの、八分類が一致しているだけでなく、その多くが類似している。第一種は風の動きによるもの。大地は水の上であり、水は火の上であり、火は風の上であり、風は金剛輪の上にあるので、強い風が起こると、火の動きが引き起こされ、その火の動きが水を動かし、水の動きが地震を引き起こすというのである。第二種は菩薩が兜率天から降りることによって起きる地震、第三種は菩薩が母胎から生まれることによって起きる地震、第四種は菩薩が最高の覚悟を成就したことによって起きる地震、第五種は如來が涅槃（寂滅）に入ることによって起きる地震、第六種は比丘の超能力によって起きる地震、第七種は天神による地震、第八種は国王の間に行われる戦争による地震である。

また、『大般涅槃經』卷上にも「八因緣」の記載がある。經文の説くところでは、世尊が入滅する直前、自らの「神力」でその寿命を三ヶ月まで延ばした。その時、大地に十八相の動きが起こり、天鼓が自ら鳴った。弟子の阿難は恐れ、「なぜこんなことが起きるのでしょうか」と世尊に尋ねた。それに対して、世尊は次のように答えた。

阿難，大地震動，有八因緣。

4) 『大正藏』第2冊，第753頁c—754頁a。

一者大地依於水住，又此大水依風輪住，又此風輪依虚空住，空中有時猛風大起，吹彼風輪，風輪既動，彼水亦動，彼水既動，大地乃動。

二者比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷，有修神通，始成就者，欲自試驗，故大地動。

三者菩薩在兜率天，將欲來下，降神母胎，故大地動。

四者菩薩初生，從右脇出，故大地動。

五者菩薩捨於王宮，出家學道，成一切種智，故大地動。

六者如來成道，始為人天轉妙法輪，故大地動。

七者如來捨壽，以神通力住命而住，故大地動。

八者如來般涅槃時，故大地動。

阿難，當知地動因緣，有此八事⁵⁾。

ここに説かれる「八因縁」は、先の『長阿含經』の記載と近似しており、自然の風の動きの以外の地震の原因は、いずれも僧侶の「神通」や菩薩及び仏の神力等、人為的な力によるものである。

次に、「三因縁」とは地震を引き起こす三つの原因を指す。これは阿含部と涅槃部との經典に見られる。例えば、『中阿含經』卷九には次のような記載がある。

世尊答曰，阿難，有三因縁令地大動。地大動時，四面大風起，四方彗星出，屋舍牆壁皆崩壞尽。云何為三。阿難，此地止水上，水止風上，風依於空。阿難，有時空中大風起，風起則水擾，水擾則地動，是謂第一因縁令地大動。地大動時，四面大風起，四方彗星出，屋舍牆壁崩壞尽。

復次阿難，比丘有大如意足，有大威徳，有大福祐，有大威神，心自在如意足，彼於地作小想，於水作無量想，彼因是故，此地隨所欲，隨其意，擾復擾，震復震。護比丘天，亦復如是，有大如意足，有大威徳，有大福祐，有大威神，心自在如意足，彼於地作小想，於水作無量想，彼因是故，此地隨所欲，隨其意，擾復擾，震復震。是謂第二因縁令地大動。地大動時，四面大風起，四方彗星出，屋舍牆壁皆崩壞尽。

復次阿難，若如來不久，過三月已當般涅槃，由是之故，令地大動。地大動時，四面大風起，四方彗星出，屋舍牆壁皆崩壞尽，是謂第三因縁令地大動。地大動時，四面大風起，四方彗星出，屋舍牆壁皆崩壞尽⁶⁾。

地震を引き起こす第一の原因は強風，第二の原因は比丘・天神等が持っている自由変化の能力，第三の原因は如來が涅槃に入ること，地震が起きる時，強風が起り，彗星が現れ，家屋が倒れるという。

5) 『大正藏』第1冊，第191頁c—192頁a。

6) 『大正藏』第1冊，第477頁c。

また、『般泥洹經』卷上にも「三因縁」の記載がある。

仏語阿難，有三因縁。一為地倚水上，水倚於風，風倚於空，大風起則水擾，水擾則地動。二為得道沙門及神妙天，欲現感應，故以地動。三為仏力，自我作仏前後已動，三千日月，万二千天地，無不感発，天人鬼神，多得聞解。

阿難歎曰，妙哉。仏為無倫，以自然法，無不感動，至德至道，巍巍乃爾。

仏言，如是如是。阿難，仏徳不小，乃從無數劫積累功德，奉行諸善，自致作仏，有是神妙自然法化，一切知，一切見，無不入，無不化⁷⁾。

ここに説かれる地震の原因は，第一に風力の作用，第二に道を得た僧侶の感応力，第三に仏の法力——即ち全てのものを变化させる能力である。

では，なぜ仏の法力が地震を引き起こすのか。それは，仏は長い年月を経て功德を積み重ねたため，全てのことが分かり，全てのものが見え，入らざるところはなく，变化させざるものなき能力を持つようになったからだという。

「八因縁」説と「三因縁」説が挙げる具体的な地震の原因は，違いがあるとはいえ，両者には二点において通ずるものがある。ひとつは自然の原因，即ち風力の作用であり，今ひとつは人為的な原因，仏・菩薩の「法力」，及び道を得た僧侶と天神との「神通」，あるいは感応力である。

風力が地震をもたらすとの考えは，仏教における世界の構造観念と深く関わっている。唐代の道積（597—683）の『法苑珠林』卷二には，次のような説明がみえる。

依『華嚴經』云，三千大千世界以無量因縁乃成，且如大地依水輪，水輪依風輪，風輪依空輪，空輪無所依，然衆生業感世界安住。故『智度論』云，三千大千世界，皆依風輪為基⁸⁾。

衆生の暮らす大地は，いわゆる三千大千世界で，大地は水を拠り所とし，水は風を拠り所とし，風は空を拠り所としている。世界がこのような構造となっているため，強風が吹くと水の揺動が引き起こされ，水が揺れ動くとき大地の震動が起こるようになる。

以上のように，「八因縁」説と「三因縁」説とは共にこうした世界構造の観念に基づいて地震の原因を解説し，風の動きが自然界にある最終的な地震の原因と考えることになる。

さて，地震を引き起こす原因は多種多様であるが，その中の多くは，やはり仏教のいわゆる「神通」と関わるものである。「通」とは無碍の意で，即ち自由自在に進出・変化する能力にほかならない。仏教においては，「神通」に関する説として，一般に五通⁹⁾，六通¹⁰⁾，十

7) 『大正蔵』第1冊，第182頁a。

8) 『法苑珠林校注』第1冊，第34頁，中華書局，2003年。

通¹¹⁾などの説があるが、それらの「神通」説は基本的に地震を起こすことを含んでいない。しかし、仏、或いは菩薩の「神通」が地震を引き起こすと説かれる仏典も少なくない。例えば、『放光般若経』巻二には次のような話がある。

復次舍利仏、菩薩行般若波羅蜜、当念具足度五神通、逮諸菩薩無量神足、能動天地、變身無数、更合為一、徹視無碍、石壁皆過、譬如鳥飛、無所触碍、能履水踏虚、身出水火、手捫摸日月、身至梵天¹²⁾。

ここに挙げられる菩薩の「神通」は、天地を振動させ、身を分けたり合したりし、物を透視し、石を穿って壁を乗り越え、水面でも空中でも歩み、水火の中に自由に入出入りし、手で日月に触れ、梵天まで飛び上がる超能力である。地震を起こす能力も「神通」に含まれているということは、地震を引き起こすことも仏と菩薩の不思議な能力の一つであり、仏や菩薩、道を得た高僧及び天神などが地震を起こすのは、「神通」という超能力を持っているからにほかならない。

二 地震の種類について

地震の種類について、仏典は非常に詳細な分析をしている。これに関して、主に「六種震動」説と「十八相動」説がある。

「六種震動」は既に阿含部の經典に見られる。例えば、『雑阿含経』巻二十三には、世尊が王舎城にいた時、「神力」で「六種震動」を引き起こしたと記載している。

時世尊以足踐城門限地、作六種震動。如偈所説、

大海及大地、城郭並諸山、
牟尼足所踐、動揺如浪舟。

仏変現如是神力、時諸民人、高声唱言、奇特未嘗有法、変現神力、如仏世尊、入城示現如是種種未曾有法。如偈所説、

地下即成平、高地反為下、
由仏威神故、荆棘諸瓦礫、
皆悉不復見、声盲及瘖啞、
即得見聞語。城郭時樂器、

9) 五通、『俱舍論』卷十八によると、①神境智証通（また身如意通とも）、②天眼智証通、③天耳智証通、④他心智証通、⑤宿命智証通をいう。

10) 六通、『俱舍論』卷二十七によると、以上の五通の他に、漏尽智証通を加えるものである。

11) 十通、『華嚴経』の十通品によると、①他心智通、②無碍天眼智神通、③過去際劫宿住智神通、④尽未来際劫智神通、⑤無碍清淨天耳智神通、⑥無体性无動作往一切佛刹智神通、⑦善分別一切言辭智神通、⑧無数色身智神通、⑨一切法智神通、⑩滅定智通をいう。

12) 『大正蔵』第8冊、第9頁c。

不擊妙音出¹³⁾。

世尊が王舎城の城門の地面を踏んだ時、彼の「神力」の作用で、大地も海も山も城も震動した。その様子は波の上に揺れている船のようで、低い所が埋まり高い所が低くなり、荊棘瓦礫は消え、耳の聞こえない人は聞こえるようになり、目の不自由な人は見えるようになり、口のきけなかった人は話せるようになり、楽器は打たずとも鳴った。これらの現象は仏の「神力」の証しとみなされている。

阿含部の経典は「六種震動」を説いたが、それらがどのようなものであるかについては説明しない。実は「六種震動」に関する具体的な説明は、後の大乘仏教の経典に見られるものである。例えば、鳩摩羅什 (Kumarajiva, 344—413) が翻訳した『摩訶般若波羅蜜經』巻一には次のようにみえる。

爾時世尊故在師子座，入師子遊戲三昧，以神通力感動三千大千国土，六種震動。東踊西没，西踊東没，南踊北没，北踊南没，辺踊中没，中踊辺没。地皆柔軟，令衆生和悅。是三千大千国土中，地獄・餓鬼・畜生・及八難處，即時解脫，得生天上¹⁴⁾。

世尊が「獅子遊戲三昧」に入った時、彼の「神通力」で「三千大千国土」に六種の震動を起こした。その六種の震動とは、①東が踊り、西が沈み、②西が踊り、東が沈み、③南が踊り、北が沈み、④北が踊り、南が沈み、⑤周辺が踊り、中央が沈み、⑥中央が踊り、周辺が沈んだという。そして、この「六種震動」の結果、衆生を解脫させ、天上へ行かせたというのである。

この経文に対して、『大智度論』巻八は次のように解説している。

問曰，此三昧何以名師子遊戲。

答曰，譬如師子搏鹿，自在戲樂。仏亦如是，入此三昧，能種種回轉此地，令六種震動。復次，師子遊戲，譬如師子戲日，諸獸安隱。仏亦如是，入是三昧時，震動三千大千世界，能令三惡衆生一時得息，皆得安隱。復次，仏名人師子，師子遊戲三昧，是仏戲三昧也。入此三昧時，令此大地六種震動，一切地獄惡道衆生，皆蒙解脫，得生天上，是名為戲。

問曰，仏何以故入此三昧。

答曰，欲動三千大千世界，出三惡道衆生，著三善道¹⁵⁾中故。復次，上三種變化出自仏身，人或信心不深，今動大地，欲令衆生知仏神力無量，能令外物皆動，信淨心喜，皆得離苦。

13) 『大正藏』第2冊，第161頁b—c。

14) 『大正藏』第8冊，第217頁c。

15) 原文は「三善道」を「二道」に作るが改めた。

問曰、有諸阿羅漢及諸天，亦能動地，何以独言是仏神力。

答曰、諸阿羅漢及諸天，不能具足動，唯仏世尊，能令大地六種震動。

問曰、仏何以故震動三千大千世界。

答曰、欲令衆生知一切皆空無常故。有諸人言大地及日月・須弥・大海，是皆有常，是以世尊六種動地，示此因縁，令知無常。復次，如人欲染衣，先去塵土。仏亦如是，先令三千世界衆生見仏神力，敬心柔軟，然後說法，是故六種地動¹⁶⁾。

問曰、何以故正有六種動。

答曰、地動有上中下。下者二種動，或東涌西没，或南涌北没，或辺中。中者有四，或東西南北，或東西辺中，或南北辺中。上者六種動，有種種因縁，令地大動。如仏告阿難，八因八縁，令地震動，如別説。……復次，地動因縁有小有大，有動一閻浮提，有動四天下二千三千大千世界。小動以小因縁故，若福德人，若生若死，一国地動，是為小動。大動大因縁故，如仏初生時，初成仏時，將滅度時，三千大千世界皆為震動，是為大動。今仏欲大集衆生故，令此地六種震動¹⁷⁾。

「六種震動」は世尊の「獅子遊戯三昧」によって起こったもので、その三昧は大地を自由自在に回転させ、三千大千世界を動かし、衆生を安んじて解脱を得させることができる。世尊がこうした三昧で三千大千世界を振動させる目的は、衆生に仏の無量の「神力」を示し、大地を振動させることを通して、人々に日月や須弥山や海など、安定の象徴さえも変動する事実を見せ、「無常」の道理を信じさせるためである。大地を振動させる能力は仏のみならず、阿羅漢・天神なども持つが、「六種震動」は世尊しかできない、なぜなら、「六種震動」は「具足動」と呼ばれるもので、普通の地震に比べて激しく、大きさによって上・中・下に分けられ、下は二種しかないのが、中は四種、上は六種もある。具体的には、普通の有道者による地震は小さな震動で、仏による地震だけが大きな震動であり、それが「六種震動」なのである。すなわち、「六種震動」は仏だけが有する超能力の証しということになる。

華嚴部の經典では、「六種震動」も仏の不思議な能力とされる。例えば、『大方広仏華嚴經』卷四十六には仏の「十自在法」一自由自在に運用できる十種類の不思議な能力がみえ、「六種震動」はその一つである。

一切諸仏，能令尽虚空界無量無数種種莊嚴一切世界六種震動，令彼世界或举或下，或大或小，或合或散，未曾惱害於一衆生，其中衆生不覺不知，無疑無怪。是為諸仏第三自在法¹⁸⁾。

16) 原文では「是故六種地動」の「地動」を「動地」に作るが改めた。また、原文はこの句に続けて「云何六種動」の五字があるが、衍文であるため削った。

17) 『大正藏』第25冊，第116頁c—117頁b。

18) 『大正藏』第10冊，第245頁a。

仏の持つこの自在法は全ての世界の「六種震動」を引き起こすことができ、震動によって大地が隆起したり沈下したり、大きくなったり小さくなったり、集合したり分散したりする。仏が大地をこれほど激しく振動させても、衆生に障碍や苦悩をもたらすことはない。だから、衆生は地震に対して恐れることもない。

また、「六種震動」説とつながるものとして「十八相動」説がある。「十八相動」は「十八相」ともいい、「六種震動」説を踏まえて地震の動き方や様子に関する更に細かい分類説明である。この説は般若部と華嚴部との經典にみえ、例えば『仏説仏母出生三法蔵般若波羅蜜多經』卷二十五は次のようにある。

爾時法上菩薩摩訶薩說是諸仏如来無來無去法時，三千大千世界六種震動，現十八相，所謂動・遍動・等遍動，吼・遍吼・等遍吼，震・遍震・等遍震，踊・遍踊・等遍踊，爆・遍爆・等遍爆，擊・遍擊・等遍擊。現如是等十八相已，一切魔宮隱蔽不現，非時開敷種種異華，大地一切華樹菓樹，皆悉傾向法上菩薩摩訶薩，帝釈天主・四大天王・及欲界諸天子衆，於虛空中雨天妙華，向法上菩薩摩訶薩散擲供養¹⁹⁾。

法上という菩薩が説法した通り、三千大千世界に六種の震動が起きた。その六種の震動は、①動、②遍動、③等遍動、④吼、⑤遍吼、⑥等遍吼、⑦震、⑧遍震、⑨等遍震、⑩踊、⑪遍踊、⑫等遍踊、⑬爆、⑭遍爆、⑮等遍爆、⑯擊、⑰遍擊、⑱等遍擊という十八種の震動として現れた。そして、「六種震動」と「十八相動」が終わった後、魔宮が消え、花が咲き、空中から花が散るなど、種々の祥瑞が現れたという。この「六種震動」と「十八相動」もまた、法上菩薩の説法に応じて起きた吉祥である。

また、『大方広仏華嚴經』卷三十六にも「十八相動」の記載がある。

爾時十方不可説不可説百千億那由他仏刹微塵等世界六種震動，東涌西没，西涌東没，南涌北没，北涌南没，辺涌中没，中涌辺没，及十八相動，所謂動・遍動・等遍動，起・遍起・等遍起，覺・遍覺・等遍覺，震・遍震・等遍震，吼・遍吼・等遍吼，涌・遍涌・等遍涌。爾時仏神力故，法如是故²⁰⁾。

普賢菩薩が偈を説いた後、無数の仏国世界で「六種震動」と「十八相動」が起こった。これらの震動は、いずれも仏の神力によるものとされる。ここに挙げられる「十八相動」の名目は、上述の『仏説仏母出生三法蔵般若波羅蜜多經』卷二十五のものと同様があるように、各仏典で必ずしも統一されていない。とはいえ、全部で十八種の名目があることは変わりない。

19) 『大正蔵』第8冊，第674頁b—c。

20) 『大正蔵』第9冊，第630頁b。

ところで、「六種震動」説は主に震動の方向性の視点から地震の動きを説明するもので、それに対して「十八相動」説は震動の特徴を六種に分類し、更に震動の範囲の違いによって地震を十八種に分けている。すなわち、「十八相動」説は「六種震動」より更に詳細な地震の分析説明となっている。では、そもそも「十八相動」は如何なる震動を指しているのか。これに対して、唐代華嚴宗僧の澄観（738—839）は、『大方広仏華嚴経疏』巻八に以下のように解説している。

三動相者、其地下是。震即是声、動即是形、声兼吼擊、形兼起踊、故有六種。此六各三、成十八相。揺颯不安為動、自下漸高為起、忽然騰挙為踊、隱隱出声為震、雄声郁遏為吼、砰磕發響為擊。十八相者、唯一方動、直爾名動。四方若次第、若一時動者、名為遍動。若八方次第、或一時動、名普遍動。又四方・八方・十方如次、名三相動。又一方獨動、十方次第動、十方同時動、又為三相。余五例之²¹⁾。

地震は地下から起こった震動であり、その震動は①震、②動、③吼、④撃、⑤起、⑥踊の六種類に分けられる。震は震動の音を指し、動は震動の形状を指し、吼と撃とは震動の音声に、起と踊とは震動の形状に含まれる。そして、動とは揺れ動く不安定のこと、起とは次第に高くなること、踊とはいきなり隆起すること、震とは震動の音が静かに鳴ること、吼とは震動の音が強烈なこと、撃とは物がぶつかるような震動の音である。これら六種の震動は、発生する範囲の差によって、それぞれ三相に分けられる。例えば、動の場合、一方位に限るものは動、四方に及ぶものは遍動、八方に及ぶものは普遍動（或いは等遍動）という。同様に他の五種も三相に分けられ、合計で十八種の震動（十八相動）となる。このように、仏教の地震に関する分析が極めて詳細であることがわかる。

澄観によれば、「十八相動」は「天地が吉祥を現す」象徴であり、それは「仏の力で感応して道と交わった」結果である²²⁾。では、なぜ仏は「神力」で「十八相動」を引き起こしたのか。それについて、澄観は上文に続けて次のように述べている。

然動何所為。依『勝思惟梵天経』、所為有七。一令諸魔怖故、二為説法時大衆心不散乱故、三令放逸者生覚知故、四令衆生知法相故、五令衆生觀説法処故、六令成熟者得解脱故、七令随順問正義故。此上七縁正是今経所為²³⁾。

仏が「神力」で「十八相動」を引き起こすのは、七つの動機があるという。今それらを大別すれば、一方では悪魔を脅かすためのもの、また他方では衆生を教化するためのものとい

21) 『大正蔵』第35冊、第561頁b—c。

22) 『大正蔵』第35冊、第561頁bを参照。

23) 『大正蔵』第35冊、第561頁c。

うことができる。つまり、「十八相動」も仏、或いは菩薩の「神力」の作用にほかならない。

三 地震の意義——厄災と吉祥

地震は一種の自然現象であって、良いものとか悪いものとか言うことはできない。しかし、地震はしばしば人類に多大な危害をもたらしたため、地震を一種の厄災とすることが一般的である。少なくとも、地震を吉祥とみなすことはないであろう。

しかしながら、仏教においてはその一般的地震観と違い、地震は必ずしも災難とはみない。もちろん、厄災とみなす地震記録もみえるが、ある種の吉祥とみなす地震の方が多い。

上述の如く、澄観によれば、厄災とみなす地震の役割は悪魔を脅かして抑えることである。このような考え方は他の仏典にも見られる。例えば、『仏本行集経』卷二十九には、次のような説話がみられる。

爾時菩薩報彼等言、我今不久定破彼輩、悉令離散、猶如風吹麩上細花、彼等一切諸魔鬼衆、如是集時、其夜正半、虛空無明、雖復有月及以衆星、光並不現、甚大黒闇、假令有眼、亦無所覩、唯見大火、起疾猛風、声大可畏、大地震動、四海悉沸²⁴⁾。

ここで描かれているのは、菩薩が地震を起こして悪魔を降伏させる場面である。地震が発生した時、真っ暗となって激しい炎が上がり、狂ったような強風が吹き、四海が沸き上がった。菩薩はこの災難を用いて、悪魔に脅威と賞罰を加えたのである。

また、「八因縁」説によると、地震は仏の涅槃に入る時も発生する。『大般涅槃経』卷下には、仏が涅槃に入った場面について次のように描写している。

既見如来入般涅槃、神情憔悴、如病新起、当於爾時、大地震動、天鼓自鳴、四大海水、波浪翻倒、須弥山王、自然傾揺、狂風奮發、林木摧折、簫索枯悴、駭異於常²⁵⁾。

仏は涅槃になったとき、大地が震動し、それと共に大きな震動音が響き、海には激しい波が湧き起り、須弥山も揺れ、狂風が吹き、樹木が折れてしまった。この光景は怖くて悲しいものである。

『仏説月光菩薩経』には仏が語った話が記載されている。昔、北インドの石賢城には、月光という国王がいった。月光国王は心が温かくて優しく、布施が好きで、人々のあらゆる求めにも応じた。その時、香醉山にいた悪眼というバラモンの悪僧が月光国王に危害を加えようと謀り、都に行って月光国王の頭を求めた。山に居る天人たちが悪眼バラモンの陰謀を知ると、「大変だ、大変だ、月光国王は慈愛の心から衆生を喜ばせる。もし彼の命が損なわれ

24) 『大正蔵』第3冊、第787頁b。

25) 『大正蔵』第1冊、第205頁a—b。

るなら、世の保護者がいなくなる」と慨嘆した。天人たちがこの話をすると、「天地は暗黒と化し、日月は消え、泉や井戸の水が枯れ、突如暴風が起こり、砂や石が吹き飛び、樹木が倒れて折れ、大地が震えて動く不詳の現象が現れた。」そして、月光国王は悪眼バラモンの願いを聞き入れて衆生に無常の道理を見せて教えるために、剣で自ら首を切った。「その時、三千大千世界にはまた六種の震動があった。」その後、仏は比丘たちに、「その月光国王とは私自身のことで、悪眼バラモンは提婆達多のことだった」と教えた²⁶⁾。この話からも月光菩薩への危害に伴う地震の恐怖の光景をみることができる。

また、『金光明経』巻二にも様々な「災異」が描写され、その中にも地震が含まれる。

其国当有種種災異，一切人民失其善心，唯有擊縛・瞋恚・鬪争，互相破壊，多諸疾疫，彗星現怪，流星崩落，五星諸宿，違失常度，兩日並現，日月薄蝕，白黒悪虹，数数出現，大地震動，發大音声，暴風惡雨，無日不有，穀米勇貴，飢饉凍餓，多有他方怨賊侵掠，其国人民多受苦惱，其地無有可愛樂處²⁷⁾。

これは四天王が仏に語った「災異」である。その中に、人民が争い、疾病が蔓延し、彗星と流星が出現し、星宿が異常運行し、二つの太陽が現れ、日食や月食、あるいは黒い虹と白い虹が度々現れ、大地が振動して地響きし、暴風や強雨で作物が実らず、飢え寒さに苦しみ、盗賊がはびこり、人民は苦悩のどん底にあった。この「災異」が発生するのは、人々が『金光明経』を信じず、そのため四天王と無数の鬼神たちはその法利や勢力と威徳を失い、それぞれの国土を治めることができなくなったからである。

以上は何れも厄災としての地震の例である。仏教における厄災としての地震の発生は、悪魔を震え上がらせるため、或いは仏や菩薩の逝去に伴う悲嘆の結果、或いは人々の間で仏法が廢れることによるというのである。

では、次は吉祥としての地震についてみてみよう。

仏教では仏や菩薩がその「神力」で地震を引き起こすことができ、その地震は衆生へ危害をもたらすことがない。例えば、『大般若波羅蜜多経』巻三には衆生へ危害のない地震がみえる。

若菩薩摩訶薩作是思惟，我於何時寿命無尽，身有無量無辺光明，相好莊嚴，觀者無厭，行時雖有千葉蓮花自然涌現，每承其足，而令地上現千輻輪，拳歩經行，大地震動，然不擾惱地居有情，欲迴顧時，拳身皆轉，足之所履，尽金剛際，如車輪量，地亦隨轉。是菩薩摩訶薩欲成斯事，応学般若波羅蜜多²⁸⁾。

26) 『大正蔵』第3冊，第406頁c—408頁aを参照。提婆達多(Devadatta)，意識は天熱，或いは天授とし，斛販王の子，阿難の兄，仏の従弟で，出家して神通を学び，利養の為に三逆罪を造り，仏法を破壊し，生きるままに地獄に墮ちたといわれる。

27) 『大正蔵』第16冊，第343頁b—c。

これは菩薩が般若波羅蜜多を学ぶことを通して色々不思議なことを達成できるという話である。菩薩の体が光り、相好が莊嚴となり、歩くときには足の下に蓮の花が現れ、その歩みは大地の震動を起こす。しかし、地上の衆生を邪魔することがないという。

また、『仏説給孤長者女得度因縁経』巻下には、世尊が舎衛城から福増城へ行く場面が描かれている。

爾時世尊……挙身出現青黄赤白種種妙色，清淨光明。……仏放光時，大地震動。於是世尊著僧伽梨衣，与彼一切所応随仏崑努鉢陀那等苾芻大衆，前後圍繞，出舎衛国，往詣福増城。時娑婆界主大梵天王知是事已，即与色界諸天子衆来仏右辺，侍衛而行。帝釈天主知是事已，即与欲界諸天子衆，来仏左辺，侍衛而行。復有善愛音等五百乾闥婆王，奏百千種微妙音樂，引導仏前。又有無数百千天龍鬼神・人・非人等，随従仏後。又有無数天女，在虚空中，各持優鉢羅華・鉢訥摩華・俱母那華・奔拏利迦華・天曼陀羅華・摩訶曼陀羅華等，及雨栴檀香・末香・儺譏嚕香・多譏嚕香・多摩羅香等種種妙香，供養於仏，又復奏彼天妙音樂。有如是等天人大衆，圍繞而行²⁹⁾。

世尊が舎衛城を離れて福増城へ行く時、体が光り、大地が震動した。大梵天王や帝釈天、乾闥婆王³⁰⁾、天龍鬼神、そして地上の国王はみな見守りに来た。乾闥婆王は音楽を演奏しながら道案内をし、空中では天女たちが花を散らしたり、音楽を奏でたりしていた。この光景は「大地震動」であるにもかかわらず、恐怖の雰囲気がないだけでなく、歌ったり踊ったり、まるで歓楽の場面として描かれている。

また、前文に引用した『大智度論』巻八の「獅子遊戯三昧」及び「六種震動」の話に引き続いて、「四種地動」が説かれている。「四種地動」の第四種は喜ばしい地震である。

復次，有人言四種地動，火動・龍動・金翅鳥動・天王動。二十八宿，日月一周繞，若月至昴宿・張宿・氐宿・婁宿・室宿・胃宿，是六種宿中，爾時地動若崩，是動属火神，是時無雨，江河枯竭，年不宜麦，天子凶，大臣受殃。若柳宿・尾宿・箕宿・壁宿・奎宿・危宿，是六種宿中，爾時地動若崩，是動属龍神，是時無雨，江河枯竭，年不宜麦，天子凶，大臣受殃。若參宿・鬼宿・星宿・軫宿・亢宿・翼宿，是六種宿中，爾時地動若崩³¹⁾，是動属金翅鳥，是

28) 『大正蔵』第5冊，第16頁b。

29) 『大正蔵』第2冊，第851頁b—c。

30) 大梵天王，Brahma の意識，大梵天ともいう。元々インド教の最高神の一つで，世界万物の創造主及び衆神の導師とされ，天界の娑若山の頂上に住み，そこは寒くもない熱くもないところで，全ての良さがそろっているといわれる。帝釈天，Sakra-devanam-indra の音・意の合訳。仏教に説かれる護法神の一つで，切利天の主である。他の32人と共に福德を修め，命が終わった後，皆須弥山頂上の第二天に生じたので，その居所は三十三天と呼ばれる。乾闥婆王，Gandharva の音訳，仏教に説かれる天上の音楽神である。切利天の帝釈に従属し，空中で音楽を演奏することができるといわれる。

31) 「爾時地動若崩」は，原文では「爾時若地動若崩」とあるが，「若」は衍字。

時無雨，江河枯竭，年不宜麥，天子凶，大臣受殃。若心宿・角宿・房宿・女宿・虛宿・井宿・畢宿・觜宿・斗宿，是九種宿中，爾時地動若崩，是動屬天帝，是時安隱豐雨，宜五穀，天子吉，大臣受福，萬民安隱。……

復次，般若波羅蜜中，授諸菩薩記當得作仏。仏為天地大主，是時地神大喜，我今得主，是故地動。譬如國主初立，臣民喜慶，皆稱萬才，踊躍歌舞。……

問曰，地動云何能令衆生心得和悅。答曰，心隨身故，身得樂事，心則欣悅。悅者共住之人，及便身之具，能令心悅。今以是三千大千世界雜惡衆生，其心粗獷，無有善事，是故世尊，動此大地，令皆柔軟，心得利益。譬如三十三天王歡樂園中，諸天人者³²⁾，心皆柔軟，歡樂和悅，粗心不生，若阿修羅起兵來時，都無關心。是時釈提婆那民，將諸天衆入粗洪園中，以此園中，樹木華實，氣不和悅，粗洪惡故，諸天人衆，關心即生。仏亦如是，以此大地粗洪弊惡故，變令柔軟，使一切衆生心得喜悅。又如呪術藥草熏人鼻時，恚心便生，即時鬪爭。復有呪術藥草，能令人心和悅觀喜，敬心相向。呪術藥草尚能如此，何況三千大千世界，地皆柔軟³³⁾。

祥瑞としての地震には三つある。一は「四種地動」の第四種，二は地神の喜びによる地震，三は衆生の心を柔らかかにさせる地震である。

「四種地動」とは，火神・竜神・金翅鳥・天王によって起きる地震のことでそれぞれ二十八宿の星宿に対応する。前三種の地震は，「その時に雨が降らず，江河が涸れ，麦の植え付けには宜しくない，天子が凶に当たり，大臣が殃を受ける」，つまり旱魃と飢饉を伴う悪い地震である。それに対して第四種の地震が起こる時は，「雨が豊かに降り，五穀の植え付けに宜しく，天子が吉にあたり，大臣が福を受け，万民は安んずる」，つまり風雨の調和，五穀豊穰，天下の平安を伴う地震である。すなわち，「四種地動」には厄災をもたらす地震だけでなく，喜ばしい地震もある。

また，地神は仏を大地の主とするので，菩薩が成仏するとき，国民が新しい国王の即位をお祝いにするように万才を叫び，歌ったり踊ったりする。更に，仏は地震を引き起こすことを通して衆生の心を優しくする。そもそも三千大千世界の衆生の心は荒んで争いやすいもの，それを仏は和らげ優しくするために地震を引き起こす。地震の後に大地が柔らかくなり，この柔らかな環境に暮らせば，その心は自然に優しくなるというのである。要するに，地震は調和のある風雨と豊かな食糧をもたらすことができるだけでなく，人間の心をも変え，悪を捨てて善なるものに従わせることもできるのである。

おわりに

以上のように，仏教の地震に関する考え方は次のような特徴をもつことがわかる。

第一に，仏教は地震に対する分析が非常に細かいということ。例えば，仏教は地震の原因

32) 「諸天人者」，原文には「諸天入者」とあるが，今は「入」を「人」に改めた。

33) 『大正蔵』第25冊，第117頁 a—b。

(因縁)を八種、或いは三種に分け、地震の動相を六種と十八種に分け、地震の機能を七種に分けるのは、何れも地震現象に対する非常に詳細な解説である。こうした分析は、恐らく仏教理論特有の緻密な法相分析の思考方法と無関係ではないだろう。

第二に、仏教は地震を仏や菩薩、そして天神や道を得た高僧たちの持つ法力・神通・感應力によって起きるとすること。すなわち、自然現象としての地震に宗教的な色彩を施したのである。勿論、仏教を信仰しない人々にすれば、こうした解説はフィクションに過ぎないが、仏教の世界観から見れば、「感應で道と交わる」ことによって起こる地震は当然のことで、理解しやすい。中国古代での災異説では地震は天意の証とされるが、それに比べれば、仏教が地震を仏や菩薩などの神力の作用とする説は一層明らかとなる。

第三に、仏教には吉祥の地震が存在すること。仏や菩薩には大いなる慈悲があり、しかも超人的な力を持っているので、彼らの起こす地震が普通の地震とは違う意味と効力を持つのは当然である。仏教では、震え上がらせる作用のある地震は悪魔にとっては災難となり、仏が涅槃に入ることによって起こる地震は衆生にとって哀れみと悲しみとなり、仏や菩薩の誕生・成道・悟りなどに伴って起きる地震は吉祥とみなされており、とりわけ地震を吉祥の象徴とするのは、他の文明に見られない仏教の独自の地震観であろう。

要するに、仏教における地震は単なる自然現象としてではなく、宗教的な意義を有するものとして認識され説明される。特に地震の原因と機能には宗教的な合目的性を付与され、しかもその解説も仏教の世界観と神話との信念に基づいたものである。

本稿は、2008年度～2010年度桃山学院大学共同研究「天変地異の社会学Ⅱ」（代表：桃山学院大学教授串田久治）の研究成果の一部である。

“Earth Tremors” Found in Buddhist Scriptures

XING Dongfeng

Earthquakes are one of the extraordinary natural phenomena that strike people with terror. Quite a few accounts of this phenomenon can be found in Buddhist scriptures, which help us understand how earthquakes, a great force of nature, were perceived in Buddhism. With precise analyses of earthquake behavior and accompanying phenomena, each of these scriptures interprets earthquakes as a desirable phenomenon for people living on earth, attributing the tremors to mysterious supernatural powers possessed by Buddha, bodhisattvas, other Buddhist deities or venerable monks. This interpretation of earthquakes as auspicious cannot be seen in other religions, and is unique to Buddhism. Given that **the Zai-yi Theory** in Confucianism, which developed in the same region as Buddhism, regards earthquakes as a disaster caused by deities expressing strong criticism of earthly rulers, the uniqueness of Buddhism’s view of earthquakes is more clearly identified.

By analyzing and interpreting earthquake-related documents found in Buddhist scriptures, this paper demonstrates that Buddhism acknowledges earthquakes not as a mere phenomenon of nature, but as a phenomenon of religious significance. In particular it shows that the causes and functions of earthquakes serve a religious purpose, and that Buddhist accounts of earthquakes represent the religion’s unique perspective on this phenomenon, based on its view of world and mythology.